

「プラチナ構想ネットワーク」の活動のひとつに、会員が小人数で自由に議論する「プラチナ懇談会」がある。これまでに東京、北九州市、名古屋、北海道下川町、大阪市、大分市、高松市などで行っているが、多くの地域が医療、新エネルギー、雇用といった共通の課題を抱えていることが分かる。意外だったのは森林への関心の高さである。

飛行機から眺めると、日本中で竹林が増えていることに驚かされる。濃緑の森林に黄緑の竹林はよく目立つ。北九州市は、近郊の森がこのままではすべて竹林になってしまうのではないかと懸念しているという。北日本の日本海側ではニセアカシアが北上を続け、白神山地のブナ林にまで達しないか、と心配する学者もいた。人が手を入れない森は、弱肉強食の世界だ。だから、強者である竹やニセアカシアがはびこる。日本の森は荒れ放題ということだ。

プラチナ日本

三菱総研理事長 小宮山宏

日本の木材輸入は海外のNGOなどから評判が悪く、森林破壊の元凶だと非難されている。歴史上、多くの文明がエネルギーや建材のために木を伐り、森林を消費して滅びていった。すでに人類は地球上の森林の60%近くを伐採し、アマゾンにまで手を付け始めている。人類文明そのものが森林の消費に突き進んでいるようにすら危惧される中で、森林が国土の70%を占める日本が林産資源の7割以上を輸入している現状は、国際的非難を浴びてもやむを得ない気がする。

かつて日本の林業は立派な産業であった。1950年代まで年間5千万立方メートルほどの木材を生産し、ほぼ

好循環に変える林業再生



自給していた。その後、外材の輸入が増し、2008年の総消費量は7800万立方メートル、うち国産は24%にすぎない。

もちろん、日本中が手をこまねいているわけではない。例えば、北海道下川町では、町の80%を占める国有林との一体運用による大規模化を目指すし、山形県最上町では計画的伐採で林業再生を目指している。大分県は内装材に特化した企業が業績を伸ばしている。高知県高岡原町は自然エネルギーによる自立にバイオマス（廃材などの植物資源燃料）の利用を企画し、岡山県西栗倉村では株式会社方式で産業化を図っている。

ただ、こうした努力の多くは経済的に成り立っていない。農林水産省からの補助金が入って成立しているにすぎないのだ。つまり森林は荒れ

放題に放置され、林業は衰退する。さらに補助金は垂れ流され、国際的に非難され、ビジョンを持たないという悲惨な状況にある。

だが、これらすべてを解決するビジョンは作れると思う。鍵は大規模化、機械化、サプライチェーンの構築による21世紀林業の創生である。大規模化の障害には、膨大な国有林の存在や小山林地主の集約の困難さなどがあるし、機械化には、林業機械を新規開発するのに十分な数の発注をまとめられない難点がある。

林産資源の多くは製材用、紙パルプ用、燃料用に使われ、少量高付加価値物も含め、森林から市場までのサプライチェーン全体像が必要だ。

100を超す自治体に参加し、産官学民が力を結集するプラチナ構想ネットワークは、これを行うのに最適な場であろう。説得力あるビジョンを構築し、好循環に変える端緒にするつもりだ。(こみやま ひろし)